

コンピューターによる仏教混淆梵語の研究 (3)

——梵文法華經写本における文法解釈の問題——

山 崎 守 一

仏教文献の中で法華經は写本の数の多さからも作品の長さからも、仏教混淆梵語の文法と語彙の包括的な研究に欠くことのできない作品の一つである。筆者は『梵文法華經写本集成——ローマ字本・索引——』第 1 卷¹⁾のローマ字転写に携わってきたが、その過程で、法華經序品にあらわれた言語がどのように中期インド・アリアン語的な要素を含んでいるかについて気づいたことを、音韻論、形態論、正書法、構文論の観点から、思いつくままに述べてみることにする。

(1) 正書法の異形 (Orthographical Variants) が散見される。例えば -ṇ-/ -ṇṇ-, -y-/ -yy-, -v-/ -vv-, -t-/ -tt- 等である。Kn : cūrṇa [108] はネパール系写本ではすべて cūrṇṇa であるのに対し、D₁ と O は cūrṇa である。āścarya/āścaryya [68], caryā/caryya [389], paryāyam/paryyāyam [408]; sarva/sarvva [1]; bodhisatva-/bodhisattva- [20], mahāsatvānām/mahāsattvānām [238] がみられる。

(2) 頭母音の省略 (Prodeligion) は MIA 一般にみられる現象である。Pkt において Anusvāra の後の api は vi (<Skt pi), 母音の後の api も vi となる (Pischel § 143)。前倚語として使用されるとき idānīm は dāṇīm となり (Pischel § 144), 語根 *v*/as の第一人称と第二人称の現在形はそれぞれ mi, si となる (Pischel § 145)。Geiger (§ 66) が引用する va=iva と eva, pi=api, ti=iti, dāni=idānīm, heṭṭhā=adhastāt, na=ena はすべて BHS で起こりうる、と BHSG (§ 4.2) は記述する。SMSR においても 'pi/pi; 'ti/ti, 'rhan/rhan; va/iva; 'sya/sya; 'bhūt/bhūt がみられる。

(3) 上付き文字 (Superscript) r はネパール系写本において顕著であり、写本にあらわれた単なる飾りのように思われる。故 J. Brough 教授によれば²⁾, doubt における b, scissors における c と同様な格式ある役割を演じていることになる。

しかしながら、ni- と nir- の混同に出くわすことがある。例えば parinirvṛto/parinivṛto [381] がある。parinirvṛta の Pkt 形は pariṇivvu(y)a であり、二重子音 -vv- が単子音になったためと考えられる (cf. BHSG § 2.86)。すなわち、

pariṇivvu(y)a に対し, parinivṛta と還梵されたのである。しかし後世, 写字生が単なるミスによって忘れたか, もしくは省略されたものとも考えられよう。

ついでながら, nir-/ni- の事実は難解な AMg. niyāgaṭṭhi(n) (Utt.1.7) に解決の糸口を与えてくれる。Jacobi³⁾ は niogaṭṭhi と読み, niyogarthin とみている。そして niyoga は「指定」, 「命令」の意味であると考えた。Charpentier⁴⁾ は niyāga の読みをとり, Pischel (§ 254) と Schubring⁵⁾ が与える niyāga=nyāya 「正理」, 「正道」を正しい語源かどうか確信できない, と記している。Āyāraṅga においては niyāga=mokṣa-mārga と註釈されている。

Śāntisūri は niyāgo=mokṣaḥ, Devendra は niyāgarthi=mokṣārthi と与え, mokṣa と同義であることを示しているが, 語源は不明である。Bollée は niyāy'atṭhi(n) (Sūyagadaṃga 1.1.2.20) に Skt nyāya+arthin を記している⁶⁾。文脈からも niyāga が mokṣa を意味することに疑いはない。しかし Skt nyāya>niyāga は語源的に可能でも, nyāya=mokṣa には疑問が残る。

そこで niyāya/niyāga は語源として *ni-yāta から由来して生じたものであり, 恐らくこれは nir-yāta と同様の意味をもつことを提案したい。niryāta は動作名詞 (action noun) niryāpa='final emancipation'⁷⁾の意味と同様な過去分詞である。-g- を伴う形態は -y- に対して誤って復元された -g- を伴う一つの hyperform である。-y- は本来, -t- から由来する。

また, dharma と dharmma の他に dhamma [254 C₁] がみられるが, これはパリー語の -rm- が直接同化されたものではなく, 比較的新しい写本の -rmm- の異表記と考えられる⁸⁾。

(4) Anusvāra は容易に省略されたり, 適切でない位置にあることがある。時として写字生の筆の勢いによるものか, 写本に付着したゴミがそのように写っているのか判別できないこともある。本来, -aṃ (acc. sg.) とあるべきところが -a となり, Anusvāra が省略される。この現象を Edgerton は真正なるものと見做しているが (BHSG §§ 8.31-34), これは議論の余地がない古典サンスクリットで書かれたテキストにおいてもみられることから, m. c. 以外では acc. sg. -a (<-aṃ) は必ずしもオリジナルな BHS 形である必要はない⁹⁾。

BHSG (§ 8.93) は nom. pl. -ās, -āḥ が acc. pl. として使用されることを教えるが, SMSR において -āṃś と -ās (maṇḍitāṃś/maṇḍitāś ca [182]; manoramāṃś/manoramāś ca [183]), -āṃs と -ās (satvāṃs/satvās t- [166]) が acc. pl. として使用されている。-āṃś/-aś の次には必ず c で始まる語が伴われ, これに対して -āṃs/

-ās は t で始まる語を伴うことが原則である。

(5) Visarga として使用されるべき二つの点、時には数字 8 に似た文字はネパール写本において単なるコンマ、あるいは句点として用いられることがある。そしてこの現象はギルギット写本とカシュガル写本の両方にも見出すことができる。しかしながら、句点として用いられたのか、真正なる Visarga なのかの判別には慎重な判断が要求されよう。

pūrvām ca gatvā dīśa sā hi raśmir aṣṭādaśa-kṣetra-sahasra-pūrṇā [340 Kn] がある。raśmi は古典サンスクリットでは男性形であるが、BHS では女性形として用いられる (cf. raśmī [212])。Kn は raśmir の読みをとるが、古い写本は raśmi/raśmī と読んでいる。いずれにせよ rasmir, あるいは raśmī は f. nom. sg. であるから、pūrṇā も f. nom. sg. ということになる。しかし、pūrṇāṃ (K, C₃) 以外のすべての写本は -pūrṇā の直後に Visarga を付け加えている。BHSG (§ 9.10) は nom. sg. -ā+Visarga を -āḥ と読むことを疑問視する。ここも pūrṇa: と表記すべきであろう。

(6) 接頭辞 ati-, abhi-, adhi- が混同して使用される。[395] において Kn は atimātra を採用しているが、ネパール系写本には atimātra, abhimātra adhimātra の三種があり、ギルギット写本は atimātra, カシュガル写本は adhimātra である。ta と bha がネパール系写本では非常によく似かよっているため、区別が困難であることに起因すると考えることも可能であるが (BHSD s. v. atikrānta), ati- と abhi- との間に意味が近いために起こったと見做した方がよいように思われる¹⁰⁾。adhi- と abhi- の混同もよくみられる。BHSD (s. v. adhimāna) は adhi-/abhimāna を与えるが、SMSR の第 2 巻が出版されれば、atimāna-, adhimāna-, abhimāna- の三語形が同一ページ (II-233) において同時にみることができであろう。ati- と adhi- の混同も知ることができる¹¹⁾。いずれにせよ、接頭辞 ati-, abhi-, adhi- の混同は MIA において一般的にみられる現象である。

(7) 写本によって綴字の混同がよくみられる。k/bh : prakāṣitā/prabhāṣitā [371]; g/y : āragayī/ārāyayī cf. O : ārādhayī [399]; g/ś : gotra/śotra [402]; c/r : paripācitā/pariparītā [387]; t/n : tena/nena [389]; t/v/y : tadāsi/vadāmi/yadāsi [406]; th/t : bhavathā/bhavatā [411]; th/ś : arthikaś/arśikaś [395]; d/k : -edaṃ/-ekaṃ [321]; dh/y/s : asaṃpravedhamānena/-veyamānena/-vesamānena [288]; d/l : kuśīdaś/kuśīlaś [394]; n/k : antevāsino/antevāsikā [306]; p/v : pi/vi [126], paripācitā/parivācitā [387]; m/p : -mātra/-pātra

[395], maharṣiṇāṃ/paharṣiṇāṃ [388]; m/r : yaśaskāmo/yaśaskāro [319]; m/s : yāmi/yosi [381]; ya/e/ye : dr̥ṣyanti/dr̥ṣenti [343], deśenti/deśyenti [357], suvyañjanam/suveñjanam [235]; y/ṣ : atyayat/atyāṣān [291]; y/s : yaśaskāmo/sasaskāmo [319]; y/h : ayaṃ/ahaṃ [401]; r/n : caritvā/cinitvā [389]; r/l : vara/vala/cala [400]; l/n : lolupātmā/lonupātmā [394]; v/dh/c : vara/dhara/cara (-la) [400]; v/m : pravucyati/pramuccati [333], saśramaṇa/saśravaṇa [294]; ṣ/v : bhāṣiya/bhāviya [334], eṣo/evo [379]; ṣ/v/s : kalmāṣa/kalmāva kalmāsa cf. O : kalpāṣa [398]; s/v : prabhāṣena/prabhāvena [343]. これらの他に ś/s がある。

上記の混同について二三の例をとりあげ、さらに検討を加えてみよう。ネパール写本において ś と s の区別は困難である。恐らく写字生が s と ś を単なる筆写上の選択と考え、書写する時の好みによって不統一に使用したように思われる¹²⁾。

BHSG (§ 4.67) は音便上のつなぎ音 (Euphonic-glide) -h- を認めず、BHSG (§ 21.80) は Mahāvastu I. 53, 2 ahaṃ が ayaṃ から由来して生起すると考えた Senart の説明を疑問視する。また、パーリ聖典協会のパ英辞典 (s. v. nahuta) は nahuta < Skt nayuta を記載するが、パーリ語における他の例はみられないようである。しかし、つなぎ音 -h- は Pkt 一般における現象であることが知られている¹³⁾。したがって ayaṃ > *a am > a-h-am ということになる。J. Brough¹⁴⁾ と T. Burrow¹⁵⁾によれば -y- > -h- の変化はガンダーラ方言では存在していたことが知られる。

流音字 (Liquid) r と l の混同はアショーク王碑文における ārabh-/ālabh-, phala/phara, maṃgala/maṃgara, loc-/roc-¹⁶⁾ やパーリ語 ārabhati/ālabhati¹⁷⁾ に見い出すことができる。BHS においても r と l の交換はみられ (BHSG § 2.49), vara も vala も同一の単語であり、方言として異なった二つの中期インド語と見做すことができる。

Chopra によると v と dh の混同は二つの文字がネパール写本において容易に区別することができないために起こったことになる¹⁸⁾。同様のことが、t と n, y と p, y と ṣ 等についても当てはまる。

v とあるべきところに m と表記される v と m の交替は Pkt におけると同様 (Pkt navakāra/namakāra < Skt namaskāra; tuvaṃ/tumaṃ < Skt tvam), BHS においても散見される。

(a) saśramaṇa, saśramaṇa と読む写本に C₁C₅P₃T₄T₆N₃D₂ があり, saśravaṇa

は、BRP₁P₂T₂T₃T₆N₁N₂O である。このように写本には二通りの読みがあり、それもほぼ同数であることから、オリジナルな語形を確定することは困難である。

(b) pravucyati, [333] 60c : nāmena vaipulyam idaṃ pravucyati (Kn). pravucyati に対して pramuccati (K), pravuccati (PkC₄BT₂N₁N₂), pravrajati (C₁C₂), prabuddhati (C₃), prabudhyati (C₆RP₁P₂P₃T₄T₅T₈T₉A₂A₃N₃), pravudhyati (A₃) があるが、文脈から pravuccati/pramuccati の意味が要求される。ただし、prabudhyati(/e) には 'is taught, proclaimed' の意味があり (BHSD s. v.), 文脈に適合するが pravrajati では意味をなさない。なお、-te に対して -ti は BHS でよくみられる (BHSG §§ 37.10-21)。このような態 (Voice) の交替は Skt においても行なわれるが、MIA 特有のものとみることができよう。

上記の綴字の混同は単なる写誤を除けば、写本の系統を明らかにする上で単語の変移(置き換え)とともに極めて重要である。

(8) Pkt 的な語彙が種々見られる。

(a) 子音の同化は Pkt における特徴的な現象であるが (BHSG §§ 2.5-16), SMSR においても例外ではない。gr̥dhṛakūṭa/gr̥ddhakūṭa [5]; pravucyati/pravuccati/pramuccati [333]; śramaṇa/samaṇa [294], etc.

(b) MIA で一般的にみられる転訛は SMSR においてもしばしば起こりうる。aya>e : spr̥henti/spr̥haya(ṃ)ti [218]; va>o : śriṇvanti/sr̥ṇon(/ṃ)ti¹⁹) [289].

(c) absolutive 語尾 -tvāna をもつ語, śrutvāna [376] が存在する。-tvāna は古典サンスクリットには存在しないが、パーリ語における -tvāna, (t)ūna, ヴェーダ語における -tvānam, AMg における -ttāṇaṃ, -ttāṇa, マハーラーシトラ語の -ūna(ṃ) と関連がある (cf. BHSG § 35.29)。

(9) 挿入母音 (Svarabhakti Vowel) は pariṣadi (/parṣadi) [65] のように散文中にみられることもあるが, ratanāna (/ratnāna) や cariyāṃ (/caryāṃ) は韻文中にみられる。挿入母音は一般に韻律を正常化するために存在するが, ratanāna[195] や cariyāṃ [389] はむしろ韻律 (Jagatī) のためには無視されねばならない挿入母音である (cf. BHSG §§ 3.98-114)。

(10) 母音接続 (Hiatus) を避けるため、また発音を容易にするために、機能をもたない saṃdhi-consonant が Pāli (Geiger § 67) や Pkt (Pischel § 353) と同様 BHS でも起こる (BHSG §§ 4.51-67)。SMSR において m は最も頻繁にみられ (iha-m-agra [134]; cūrṇṇa-m-eva), r (bhagavata-r-aṣṭau [306]; putrā-r-abhūvan [306]; yathar-iva [193]) がこれに次ぐ。y (iha-y-ekarasminā [205 T₃]) と n (rasmiṇ-n-aṣṭādaśa

[340 C₃]) は一つの写本においてみられるのみで、v と d は全くみられない。

(11) 字位転換 (Metathesis) はパーリ語においてよくみかけられる現象であるが (Geiger § 47.2, § 65.1)²⁰⁾, BHS においても散見される。主としてネパール系写本はある段階で -lava-[293] から字位転換によって -vala- と表記している。

(12) 男性複数形 -āni がみられる。eg. putrāṇi [257], putrāṇy [306]。もしこの読みが正しいなら、パーリ語や Pkt において性 (Gender) の交替がしばしば行なわれるように²¹⁾, BHS における性の交替の例である (cf. BHSG § 8.86)。

(13) 不定過去 (Imperfect) にまじって optative 形がみられる。[331] において不定過去 prāvrajan (O のみ aorist pravrajiṃsu) に対して optative prāvrajet (P₁P₂) がある。また [375] においては abhavan, abhūt に対して bhavet (BP₁P₂A₁) がある。[331] も [375] も文脈から 3 人称複数形で過去の意味をもつ動詞が要求される。Skt において -et は 3. sg. optative を表わすが、もし prāvrajet も bhavet も正しい読みであるなら、3. pl. optative と解することも可能となる (cf. BHSG § 29.15)。それ故これらは紛れもなく過去の意味を表わす optative の例である。このような用法は BHS のみならず (BHSG §§ 32, 85ff.), Pkt においてしばしば実証される (Pischel § 466)。

(14) MIA において口蓋子音の前後で母音の口蓋音化 (Palatalization) がみられ、この現象は BHS でも例外ではない。ārāgaya/ārāgayī (m. c.) [399]; upapadya/upapadyī [114]; caritvā/cinitvā [389]; darśayate/darśiyate [349]; diśa/diśī [397]; nayuta/niyuta [216]; bhāṣaya/bhāṣiya [369]; bhāṣiṣya/bhāṣiṣyi/bhāṣiṣye [363]。

これらのうち特に absolute -ya>-yi に注意が惹かれる。absolute 語尾 -ya が -i もしくは (i) となるのは Apabhraṃśa において知られている (Pischel § 594)。この現象は稀ではあるが Pāli にもみられ、K. R. Norman 先生は pāvisi “having entered” をあげている²²⁾。また AMg. aṇuvī も *anu-vi-ci-ya の absolute である。まず、c が落ち、さらに -ii- が i となり aṇuvīya (これは v.l. にみられる) となる。さらに口蓋音 y の後で母音の口蓋音化が行なわれ、*aṇuvī-(y)i となったのである²³⁾。-ya>-(y)i/i は Edgerton²⁴⁾ が absolute であると確信した upasaṃkramī [145] を支持することになる。本来、21a は upasaṃkramya lokavīnāyakeṣu と読まれていたことが推察され、口蓋音化が起こり upasaṃkram-(y)i となり、さらに韻律が Triṣṭubh であるため upasaṃkramī となったものと見做すことができよう。

(4) 同様に唇音化 (Labialisation) された語彙も種々の写本に見い出すことができる。ima/īmu [110]; kauśalya/kauśalyu (vināyānām) [409]; dharmasvabhāva /-svabhāvu [371]; yaśakāma-/yaśakāmu- [397].

口蓋音化や唇音化は布教師が北インドからセイロンに派遣される以前、すなわち、紀元前 250 年以前にはすでに北インドにみられた現象であり²⁵⁾、校訂に際してはこのことに十分注意を払うべきであろう。

- 1) *Sanskrit Manuscripts of Saddharmapuṇḍarīka, Collected from Nepal, Kashmir and Central Asia. Romanized Text and Index* (梵文法華經写本集成——ローマ字本・索引——), by Keishō Tsukamoto, Ryūgen Taga, Ryōjun Mitomo and Moriichi Yamazaki, Vol. I, Tokyo 1986 (=SMSR). 他の略記号: AMg = Ardhha-Māgadhī; BHS = Buddhist Hybrid Sanskrit; BHSD(/G) = F. Edgerton, *Buddhist Hybrid Sanskrit Dictionary (/Grammar)*, New Haven 1953; Geiger = W. Geiger, *Pali Literature and Language*, Calcutta 1943; m. c. = metri causa; Pischel = R. Pischel, *Comparative Grammar of the Prakrit Languages*, Benares 1957; Pkt = Prakrit; MIA = Middle Indo-Aryan; Skt = Sanskrit. 2) J. Brough, "The Language of the Buddhist Sanskrit Texts", *Bulletin of the School of Oriental and African Studies* (=BSOAS), vol. XVI, p. 354. 3) H. Jacobi, *Jaina Śāstras* (Part II), Oxford 1895, p. 2, n. 2. 4) J. Charpentier, *Uttaradhyāyanaśāstra*, Uppsala 1922, p. 276. 5) W. Schubring, *Ācārāṅgaśāstra*, Leipzig 1910, s. v. niyāga. 6) W. B. Bollée, *Studien zum Sūyagaḍa*, Wiesbaden 1977, S. 189. 7) Monier-Williams, *Sanskrit-English Dictionary*, Oxford 1899, s. v. niryāna. 8) cf. J. Brough, *op. cit.*, p. 356. 9) J. Brough, *op. cit.*, p. 360. 10) K. R. Norman, *Elders' Verses* I, London 1969, p. 196. 11) H. W. Bailey, "Two Kharoṣṭhī Inscriptions", *Journal of the Royal Asiatic Society* (=JRAS), 1982, p. 149. 12) J. Brough, *op. cit.*, p. 354. 13) S. N. Ghosal, "The Euphonic-glide H in Prakrit", *Journal of the Oriental Institute, Baroda* (=JOIB), IX pp. 256-59. 拙稿, 「Uttarajjhāyā 研究II」, 『中央学術研究所紀要』No. 10, p. (9). 14) J. Brough, *The Gandhārī Dharmapada*, London 1962, § 39. 15) T. Burrow, *The Language of the Kharoṣṭhī Documents from Chinese Turkestan*, Cambridge 1937, § 28(3). 16) K. R. Norman, "Some Aspects of the Phonology of the Prakrit underlying the Aśokan Inscriptions", *BSOAS* XXXIII, p. 138. 17) PED s. v. ārabhati. 18) T. R. Chopra, *The Kuśa-Jātaka*, Hamburg 1966, p. 96. 19) va > o, va < o については K. R. Norman, "Samparasāṇa in Middle Indo-Aryan", *JRAS* 1958, p. 47. 20) M. Mallik, "Metathesis in Pali", *Indian Linguistics*, vol. 26, pp. 93-95. 21) Geiger § 76, Pischel §§ 356-59. 22) K. R. Norman, *op. cit.*, p. 282. 23) Norman 先生は最近, Pali anuvicca との関連で説明されている。"Pali Lexicographical Studies IV—Eleven Pali Etymologies", *Journal of the Pali Text Society*, XI, p. 37. 24) F. Edgerton, "The Prakrit underlying Buddhist Hybrid Sanskrit", *BSOAS*, 1936, p. 516; BHSG § 35.50. 25) K. R. Norman, "Middle Indo-Aryan Studies XIII—The Palatalization of Vowels in Middle Indo-Aryan", *JOIB*, 25, p. 341; "The Labialisation of Vowels in Middle Indo-Aryan", *Studien zur Indologie und Iranistik*, 2, p. 57.

<キーワード> 梵文法華經写本, 仏教混淆梵語, 中期インド・アリアン語, ブラークリット (仙台電波高専助教授)